山岳友の会会報

2018年1月　第28号

湯殿山神社にて（第32回出羽三山現地研修会）

もくじ

年頭のご挨拶　会長　山口　孝……2

第３４回伊勢現地研修会　報告１　百瀬　武……2

報告２　村重　恵美……3

第３２回出羽三山現地研修会　報告２　細萱　繁……4

信州フィールド科学賞・第１１回憧憬の森講演・会員交流会

報告　小林　久雄……7

年頭のご挨拶

友の会の皆様、新年あけましておめでとうございます。

月山からの下山道にて

昨年も多くの研修会にこぞって御参加いただき、各企画共全て順調に進み、各会員の皆様に深く感謝申し上げます。特に印象に残っている「出羽三山を巡る旅」について少し書かせていただきます。

霊峰月山は、行きはよいよい帰りはこわいの登山となり、湯殿山神社への下りの道はほぼ川歩きのようなビチャビチャの急な道で、皆必死でおりてきました。羽黒山（現在）月山（過去）湯殿山（未来）の三ヶ所を巡る「生まれかわりの旅」ということで、皆様頑張って歩き通しました。下山途中で意識もうろうの若者を引き連れておりて来ましたが、彼にとっては、友の会の皆様と出合ったお蔭で本当の意味で「生まれかわりの旅」となったことでしょう。

さて、今年のメイン行事は「利尻・礼文島を巡る旅」で 6 月 6 日（水）～10 日（日）に予定しておりますので、このチャンスに多くの方の御参加をお待ちしております。

本年も皆様にとって穏やかで素晴らしい一年となるよう願ってやみません。

今シーズンも、どんどん山へ出かけましょう。

友の会会長　山口　孝

第３４回現地研修会に参加して　―第３４回伊勢現地研修報告１－

今回の現地研修の特色は、神宮参拝であった。神宮林野部門の人から説明を受けながら内宮の囲いの中に入って正式参拝することができた。正式参拝は服装を整えることが標準になっているので、男性は背広にリュック、女性はフォーマルな服装にリュックという姿で出発参加となった。

結果、一般の人の参拝地点から囲いの戸をくぐり、一歩内宮神殿に近づいての一瞬の参拝となる。貴重な体験で、渡邊さん特段の働きかけのおかげとなった。

宿泊地の榊原温泉は、枕草子にも記載されているという歴史を持った温泉地で、伊勢へ行くのに身を清めるところでもあったという。付近には火山がなく、地層上の偶然のめぐみの温泉と推定できる。

次の日は山岳目的地である御在所岳に登る。現地につくと登ることなく、６人乗りロープウェイに乗り、リフ

トに乗り継いで少し歩いただけで頂上に立つことができた。三重、滋賀の県境にある頂上からは、雲間に両県の山並を遠望できた。近くの山々は紅葉に色づいてきれいそのものであった。

今回の現地研修会の神宮、榊原温泉は、会員の情報提供を駆使しての内容や、現地三重県での参加者、岡山からの参加、会員の娘さんは東京から来るという友の会の総合力を感じたおもしろい旅であった。

百瀬　武

お伊勢参りと楽々登山　―第 34 回現地研修会報告２―

10 月 14、15 日、第 34 回現地研修会「伊勢神宮参拝と御在所岳そして榊原温泉」に行ってきました。

土日の泊まりがけ行事はなかなか時間が作れずいつも参加を諦めていましたが、今回は伊勢神宮の特別参拝ができるとのことで無理を言って仕事を休み、ローカル線の奥地からは集合時間に間に合わないため便利な駅まで車で出かけて松本にたどり着くという万全の策。

天候は雨、正装をレインコートで隠しながら見慣れぬ気配の集団に近づくと友の会の皆さま方。スーツの上に山用合羽を着込んだり、トレッキングシューズを合わせたりと他では見られないオリジナルファッションが素晴らしい。

昼食～伊勢到着は渋滞もあり慌ただしくなりましたが定刻 14 時に宇治橋を渡って内宮参拝です。

ご案内は神宮司庁営林部長の笹岡哲也氏。20 年ごとの遷宮に必要なヒノキを神宮内五十鈴川上流で賄うべく 200 年計画で森を育てている様子や地元の材は鎌倉時代には不足して各地から集められているとのお話をお聞きし、是非伊勢のお山も訪ねてみたいと思いました。社叢の樹種も目新しく、濃い緑がとても美しいものでした。

無事皇大神宮ご本殿前での特別参拝を果たし、雨に濡れた玉砂利を踏みしめながら場所場所で石の大きさが異なる事が気になり何故？どこから来た石？触りたい！また来なくてはと決意しながら皆さんの後を追いました。お計らいいただいた渡邊修さん、ありがとうございました。

榊原温泉で慣れぬおめかしの疲れを癒し、翌日は御在所岳へ。ロープウエイとリフトで難なく登頂。花崗岩は雨に濡れても滑りにくく、岩の上に登ってはしゃぎました。残念ながら遠くの景色を望むことはできませんでしたので、ここにもまた来なくては。

二日間、楽しく貴重な体験ができました。

村重　恵美

出羽三山の山旅　ー第 32 回出羽三山現地研修会報告２ー

今夏は北アルプスがちっとも望めない、ぐずつき空模様が続いている。8 月末になれば、天気が回復するだろうと、好天を期待しつつ、東北の山旅・出羽三山登山を楽しみに待った。

ところで、出羽三山とは、山形県中央部にある。それぞれが独立峰ではなく、主峰・月山（標高 1,984 m）が中央に位置し、その両端の北尾根に羽黒山（414m）と東尾根に葉山（1,462m）という二つの山が連なる三山形式をなしている。ただし、近世以降の出羽三山は、葉山に代わって、西尾根の湯殿山（1,504m）が三山のひとつとなった。

山岳信仰の聖地として、1,400 年以上にわたり、修験の地として信仰を集めている。山岳信仰は古くから自然崇拝のひとつとして存在し、霊山のご神体が麓に暮らす人々を災厄から守った。これが宗教として体系化されたのが、修験道である。経典のような教義を文字化したものは乏しく、江戸時代に定着した「擬死再生儀礼」と呼ばれ、「生まれ変わり」の意味を持つとされる、過去・現在・未来の三世を巡る「三関三度」の旅を経験し、仏と一体になるための山中での修行によって、修験道を荷う宗教者としての能力を体得する実践的な願行をするのが修験者であり、明治の神仏分離からは山伏と呼ばれている。修験道における入門儀礼や上位の資格を得るための儀礼が、「峰入り」と呼ばれる修行であって、霊山の尾根道を辿って、ひたすら歩き続ける山行をすることになる。今でも、春・夏・秋・冬　季節毎の峰入りが行われている。

出羽三山のような豪雪地帯にある霊山の場合は、雪が解けてからしか安全に登拝することができない。そのため、宿坊集落や参詣者に関わる諸職が居住する門前町に里宮が置かれ、夏季以外にも参拝できる場となったのが、里山である羽黒山だ。山頂には里宮として、三山を合わせ祀る出羽三山神社のご本社、三神合祭殿が置かれる。現世（現在）を象徴する観音菩薩が祀られている。

月山登山道の雪が消える時期になると、ようやく三山参りの季節となる。奥山である月山山頂の「御室」には、奥宮としての月山神社本宮が置かれ、前世（過去）を表す阿弥陀如来が鎮座する。月山開山祭は 7 月 1 日に行われている。雪が消えてからと雪が降り始めるまでの間のみの 2 ヵ月半が開山期である。

かつての明治以前、三山のうちに含まれていた葉山は薬師如来（未来）とされた。ところが、元来湯殿山も山岳信仰の対象であり、山自体に神が鎮まるものとして、人工的な信仰の場をつくることは禁じられてきたという。湯殿山神社は湯殿山山腹の月山より流れる梵字川沿いに鎮座する。本殿や社殿が無い点に特徴があるが、谷間にもうもうと湯煙りを上げ湧

出する温泉成分が凝固した赤褐色の巨岩を「御神体」とした。ここでの修行は、裸足で紙人形にて禊ぎをして、御神体に登拝することが、来世（未来）を象徴するという大日如来と一体になる行為とされ、非常に崇められている。湯殿山は「三山」というよりも、観音菩薩・阿弥陀如来・薬師如来の導きにより、現在・過去・未来の三関を乗り越え、ここで大日如来の境地に至って、修行を続けることで究極の悟りを開いて、肉身のままで仏になることを指す「即身成仏」を達成するという「三関三渡」の修行場となった。ちなみに、湯殿山総奥の院の開山日は 4 月 8 日。一方真冬の 12 月 8 日とも伝えられている。

従って、出羽三山は、正式には井羽（いでは）神社、月山神社、湯殿山神社の三社によりなっており、この順番に巡るのが一般的な参拝路だそうだ。

いよいよ出発の日を迎えた。8 月 28 日（月）、天気情報では期待外れの、相変わらず東北北部に前線が停滞したままであった。県内から 18 名の仲間を乗せたバスは、通い慣れてしまった車窓と、恒例の車中宴会に満喫しつつ、今日の目的地、羽黒山へと向かう。

日本海東北道を下りて、鶴岡市街を横切り、田園の中にたたずむ羽黒山大鳥居を眺めて、松本から 7 時間半で羽黒山麓の髄神門（ずいしんもん）に到着。

さあ頑張ろう。髄神門（旧仁王門）を抜けて聖域に入ると、2,446 段の石段、1.7kmの参詣石畳道が続く。継子（ままこ）坂を下って、神橋を渡ると、右手に須賀の滝、左に周囲 10m樹齢 1,000 年の爺杉、約 650 年前に再建された東北地方で最古の国宝五重塔（29.9m）を眺め、樹齢 300-500 年約 600 本が林立する特別記念物杉並木の中をひたすら登る。石段脇には様々な史跡や祠、一息入れる茶屋もある。一の坂、二の坂、そして三の坂と、天空を仰ぐ結構な急坂があって、息も絶えだえ、標高差 300m余、上り標準時間は 60 分である。

山頂に近づくと、縁結びの神様・埴山姫神社、参籠所・斎館が並び、そして山頂。出羽（いでは）神社三神合祭殿を参拝。重要文化財で、200 年前に再建された、深雪に耐える日本最大の厚さ 2m萱葺き建物、月山・羽黒山・湯殿山の出羽三神を祀っている。続いて、大鐘、歴史博物館、茶屋店。広い大型車用駐車場にバスがぽつんと待機している。平日の午後も遅い時間帯での参拝だったので、雄大かつ幻想的な境内は閑散としており、より厳粛さを実感できた。

バスに乗って直ぐに、羽黒山有料道路を登拝する 40 名程の白装束で身を固めた山伏集団に遭遇し、一層の霊山雰囲気に浸れた。

月山志津温泉に向う。山形自動車道を一区間使うものの、峠越えになる湯殿山 IC

から月山 IC までの 10 数kmは未開通。国道 112 号線の月山新道を快適に、緩く湾曲登坂して長大トンネル 2 本を潜る。国道を分岐してからは、月山南麓のブナ林を 10 分程登り上がり、標高 700m、10 軒の旅館がこじんまり並ぶ温泉街だが、かつでは内陸と庄内を結ぶ、三山参りの旅人が行き交った六十里越街道の峠下集落であった。今では、月山夏スキーの拠点になっている。日本秘湯を守る会会員の宿「まいづるや」に無事到着。

ここの泉質は、山中でありながらも食塩泉。諸病の効能に疲労回復と健康増進。確かに、味わいのある湯である。地元産の食材にこだわる料理をしたためつつ、夜宴に饗じた。今日も充実した逸楽の日であった。

翌朝、6 時の NHK ニュースが始まると、携帯電話の警報が鳴り、テレビにはニュース速報の字幕が、野外では防災無線 J アラートががなっている。北朝鮮がミサイルを太平洋に発射し、北海道上空を通過したのだ。避難を呼び掛けるものであるが、何ら切実感はなかった。

ここ志津温泉の積雪は 6mにもなるそうだ。深雪のため冬スキーには適さず、月山スキー場は毎年 4 月 10 日にオープン。夏スキーは 4 月から 7 月まで滑走可能、7～9 月の夏山が月山登山のシーズンとなり、リフトは紅葉の楽しめる 10 月半ばまで営業とのこと。

ブナ林を縫って、月山ペアリフト乗場下駅に向かう。バス乗車は 10 分足らずだ。リフト上駅（1,510m）までは、標高差 260mを 15 分でらくちん登坂。途中、足元には「森林限界 1,400m」の大きな案内看板がある。日本海からの季節風をまともに受けるため、月山には針葉樹林帯を見ることができず、一面草原に変ってしまった。この辺りからは 3,000m級の山でないと見られないような沢山の高山植物が咲き誇るお花畑の雪田・湿原地帯や、ハイマツ帯に出る。更に登ると、成層火山で浸食作用が進み、なだらかな山容になってしまったのだが、火山の岩石がごろごろする岩場を登り詰めて山頂に至る。

濃いガスが巻き、時折風で山並みが透けて見え隠れする。まず、月山の前峰、姥ヶ岳（1,670m）に直登。日本海が望めるのだが、残念な気象状況。これからは稜線歩きになる。湯殿山神社へ下る分岐点の鞍部、金姥、リフト上駅から山腹を巻いてきた合流点の牛首（1,700m）を経由して、山頂へ 3km、1時間半でたやすく登頂できたが、相変わらず深い霧中である。

山頂には、石垣を組んで社務所・お札所が所狭しと並び、その奥に月山神社本宮が鎮座する。祈祷料を受付で支払うと、境内でお祓いを受けた。岩塊に囲まれた聖域・御室には、本宮のほか、末社の祠も円状に祀られてあって、次々に拝礼。荘厳な冷気に包まれている。

佐々木先生がいつまでも戻らない。かつて、ふた夏、ここに泊めてもらって、月山の調

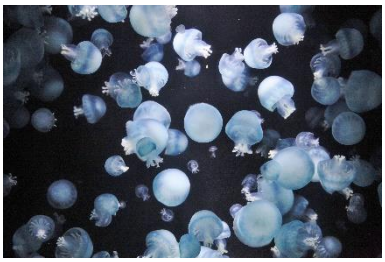
査研究に勤しんでいた由。受付の神職とは顔見知り、再会の会話に沸いてしまったとのこと。

神社に隣接する山頂小屋に入って、佐々木先生が頂戴したお神酒をいただき、早目の昼食休憩。この小屋の営業時間も神社と同じく、7 月～9 月中旬の夏季のみ。風景や高山植物の写真が飾られてあり、興味深く眺め回った。

いよいよ雨が降り始めたが、一時の小雨で終った。金姥まで下り返し、その先は月山から連なる姥ケ岳・湯殿山・薬師岳の谷筋道、月光坂のたいそうな急崖を降りて行く。湯殿山神社まで、西方へ 6km、標高差約 1,000mを 2 時間半の行程であった。深雪地域であるため、樹高のある木々は繁茂しておらず、見晴らしが効く草原が続いていた。大分隊列が分散してしまい、神社大鳥居下の駐車場でたっぷり休憩。安着の車座が盛り上がった。

今晩の宿泊は、三旅目の湯野浜温泉だ。雄大な庄内平野の稲田や、裾野だけではあるが月山・鳥海山を眺めつつ、バスに心地よく揺られた、安ら気の 1 時間を過した。

宿は海岸から離れた高台、閑静な山の懐にあった。5 年を掛けた掘削は困難を極めたが、念願叶って昭和 3 年辰の年に温泉が湧出したことから、龍(たつ)の湯と名乗る。極上の湯でたっぷりと湯巡りをと、大浴場には七つの湯舟に、アルカリ性単純泉と塩化物泉の二種類の源泉が掛け流しされている。料理には「お品書き」が添えられ、旬の素材を生かした創作料理が美味しかった。施設も、料理も整った高級な宿である。



今年も加茂水族館に立寄った。淡水魚、海水魚、そしてクラゲ水槽を巡回。クラゲの給餌解説、アシカショーを観賞、堪能した。

後は、バスをひたすら走らせるのみ。帰路はお疲れ休息タイムが長引き、平穏無事な車内である。

東北の霊峰・出羽三山と秀でた温泉場を巡る旅は、山岳信仰の歴史を歩む、正しく現地研修に相応しく、健康増進と癒しを得られた出湯を満喫できた。お疲れ様でした。有難うございました。

細萱　繁

信州フィールド科学賞授賞式・第 11 回憧憬の森講演会・会員交流会　報告

12 月 2 日駅前会館で信州フィールド科学賞の受賞式と講演会がありました。受賞は東城研の 1 期生立正大の関根さん、「山岳域による河川棲む水昆虫類の遺伝子的分化・分子系統地理学的研究」(ウスバカゲロウ)の研究のお話でした。

西日本東日本と韓国大陸モンゴルなど広範囲の研究のお話でした。

自らふ化し、夜間僅か 2 時間ほどで産卵して死んでしまうウスバカゲロウの一生や

雌だけでの産卵による生命の伝承など興味深い講演でした。

引き続き「友の会」来年度計画への意見では、谷川岳登山や伊吹山に二王子岳・帝釈山・能郷白山などの希望に 7 年目にして海を渡る利尻・礼文の計画などガイドの笹木さんのお話で盛り上がりました。稚内集合解散についても、20 名程度集まれば新潟港よりのフリーをバスによる移動で時間はかかっても旅費が格安になりそうな説明もあって年明け早々に具体化して募集の方向性が話題となりました。早めに調整したいと考えます。

第 11 回「憧憬の森講演会は佐々木さんより「中部山岳の高山帯における景観の形成メカニズム」のお話を頂きました。蝶ヶ岳西側のシラビソとハイマツの生息域の地形形成や二重山稜のメカニズムなど身近な山域を具体的にお話いただきました。

小竹亭での交流会(忘年会)にも多数参加いただき来期年の夢も語り合いました。

小林　久雄

信州大学山岳友の会会報　第 28 号
発行日：2018 年 1 月 9 日
発行：信州大学山岳友の会
〒390-8621　長野県松本市旭 3-1-1
信州大学山岳友の会事務局
TEL：0263-37-3332
FAX：0263-37-2438
E-mail：suims@shinshu-u.ac.jp